

自己実現言説における「社会」の意味合いについての歴史的考察 —テキストマイニング手法による量的研究と質的研究との接合の試み—

佐々木 英 和

宇都宮大学教育学部研究紀要

第66号 第1部 別刷

平成28年（2016）3月

A Historical Assessment of the Implications of the Keyword “Society”
Frequently Used in the Self-Realization Discourses:
An Attempt to Graft Qualitative Studies onto Quantitative Ones
with the Assistance of the Text Mining Method

SASAKI Hidekazu

自己実現言説における「社会」の意味合いについての歴史的考察 —テキストマイニング手法による量的研究と質的研究との接合の試み—

A Historical Assessment of the Implications of the Keyword “Society”
Frequently Used in the Self-Realization Discourses:
An Attempt to Graft Qualitative Studies onto Quantitative Ones
with the Assistance of the Text Mining Method

佐々木 英和[†]
SASAKI Hidekazu

概要

本稿は、日本語「自己実現」についての言説のうち「社会」というキーワードを含む文章を研究対象として、その時代ごとの特徴を実証的に明らかにすることをめざしたものである。考察の結果として、現代人の「社会への関わり方」の指標的役割を「自己実現」が間接的に果たす傾向が判明した。たとえば、1980年代後半以降の「自己実現」という日本語の普及に伴って「女性の社会への関わり方」に焦点が当たるようになってきたことや、1990年代後半以降は「社会参加」や「社会貢献」と併記される形で「自己実現」が課題化されるようになったことなどが明らかになった。なお、研究方法論として、新聞データベースを活用して収集した「自己実現」関連記事という素材についてテキストマイニングを用いて精査することは、質的データを量的次元で整理し直すことであると同時に、量的研究を基盤として質的研究の説得力を高める混合的方法でもある。

キーワード：コンピュータ言語分析, テキストマイニング, 自己実現, 社会, 社会参加, 社会貢献, 女性, 1980年代

Summary

I have collected numerous descriptions of *jiko-jitsugen*, which stands for self-realization in Japanese. In this study, I will investigate the *jiko-jitsugen* articles including the Japanese word *shakai*, meaning society, and elucidate their chronological features in a positivistic manner. I can point out that there has been a tendency in approximately the past thirty years for the word *jiko-jitsugen* to indirectly play the indexical role of indicating how modern Japanese relate to society and should interface with it. For instance, since the latter half of 1980s, the question of how women should be involved in society has been increasingly focused on, with the spread of the keyword *jiko-jitsugen*. Since the late 1990s, *jiko-jitsugen* has become a popular topic of discourse, mentioned along with “participation in society” and “contribution toward society.” These unexpected research results are obtained from my scrutiny of descriptive materials on *jiko-jitsugen* collected by utilizing the two database systems made from two Japanese newspapers, *The Yomiuri* and *The Asahi*, by a

[†] 宇都宮大学 地域連携教育研究センター (連絡先: sasakih@cc.utsunomiya-u.ac.jp 佐々木英和)

computational linguistic analysis using the text mining technique. I believe this is one of the mixed methods that are expected to advance research methodology not only to rearrange accumulated qualitative data in the quantitative level but also to strengthen the persuasiveness of qualitative research through the outcome of the quantitative approach.

Keywords: Computational Linguistic Analysis, Text Mining Technique, Self-realization, Society, Social Participation, Social Contribution, Women, 1980s

はじめに

本稿は、ここ数年にわたって宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』で発表してきた自己実現関連論文の続編に当たる¹⁾。「社会」というテーマについては、当初予定の順番を変更して、全体像を把握するよりも、重要ポイントを強調して深めることを優先して行った。というのは、「自己実現」にとって「社会参加」・「社会貢献」・「社会進出」が特徴的な単語であるという事実は、筆者にとって思いがけない発見であり、それを少しでも早く公表することに十分な意義を感じたからである。

実は、こうした紆余曲折が生じるのも、ここ数年にわたりコンピュータ言語分析ソフトとしてテキストマイニングを用いる中で、研究内容という点でも、また研究方法という点でも様々な発見があって、良い意味で試行錯誤できている証である。そして、そのような回り道は、実は研究方法論を洗練する過程にもなっている。筆者としては、「自己実現」についての歴史研究として、控えめに見て「恣意的で独りよがりな思い込み」にとどまらない程度の説得力を持っていると言い切れる程度には、実証的に高度な次元へと向かう研究方法を生み出しつつあると考えている²⁾。

そこで、量的次元の説得力を担保とした上で質的考察を深めるといった新たな研究方法論を確立することが必要かつ可能ではないかと考えるに到った。この試論を段階論として説明する。

第一段階は、量的把握が軸になるので、認識論的には「同質性」への変換が求められる。この研究的発想について抽象的な言い方をすれば、互いに一致することが全くないと言ってよいほど多様な記述について、あえて「質的多様性」を等閑視し「同質性」へと還元してしまうことである。この「多様さ」を「同じ」とみなす認識それ自体は乱暴な作業だが、「質的データ」をまさに「データ」として量的次元に変換する際の正当性を担保するためには必要不可欠な作業である。自己実現言説を例に取れば、「自己実現」という言葉を用いた文章を数えて件数を確認することは、量的次元で言説の全体動向の把握を進めることに相当する。

第二段階とは、量的次元と質的次元との接続という意味合いについて、認識論的には「類似性」という言い方が適当である。多様な記述から目立つキーワードを抽出して、その傾向を把握することは、「同質性」が前提となったからこそ量的次元で正当に処理できたとみなせる質的データについて「共通性」を基準として整理し直すことである。自己実現言説を例に取れば、「自己実現」という言葉を用いた文章を集めてみて、その中に同じ単語がどれくらい存在するかを数えて傾向を確認することは、いったん量的に均質化して暫定的に「同質」とみなされたデータの中から、「共通性」を基準として「似ている」と「異なる」との仕分けをして、「似ている」とみなせる文章ばかりを集めて、その動向を探索することである。今回の論文に即して言えば、諸々の自己実現言説につい

て、「社会」という条件が基底に存在することで、同じ単語を含む文章の全体的傾向にどのような量的変化が生じてくるかを把握するのである。

第三段階としては、量的次元からほぼ独立して認識しうる「質的素材」の「多様性」を再発掘することが前提となる。個々の文例を読み直すことには、質的素材を質的次元で掘り下げるという意味あいがあり、質的素材を「質的データ」として扱うことは異次元の手続きである。個々の文章についてキーワードが用いられている文脈を解析することは、「同質性」を基盤としながら「類似性」を基準として分け直した諸々の記述について、それらとは異次元にある「質的多様性」に着目した個別の考察を行うことである。本稿に即して言えば、「類似性」と「異質性」との双方を見すえた考察を進める際に、「社会」というキーワードを含む自己実現言説と自己実現言説一般とでは、どのような点が似ていて、どのような点が異なるのかについて、まさに多様な記述によって明らかにすることが到達点に位置するというわけである。

なお、本稿では、「自己実現」という単語を用いたものとして抽出された文章群に対して「自己実現」、それに加えて「社会」という単語も含むことを条件付けて抽出された文章群に対して「自己実現&社会」という表記を用いることを事前に断っておく。

I 「社会」を含む自己実現言説の全体的特徴

本稿では、「社会」を含む自己実現言説の特徴を明らかにすることが第一目標となっている。必要とされる手順として、「社会」との兼ね合いで目立つ言説の全体像を押さえることがある。その際、「自己実現」を含むことを基準にして抽出されたものと、「自己実現」も「社会」もともに含むことを基準にして抽出されたものとを比較することにより、「社会」が含まれることの意味合いを描き出すことが効果的だと思われる。

テキストマイニングソフトによれば、素材を収集した全期間（1917～2009年）において、「自己実現」における母数となる文章の親件数は2324件（総記事数は1833件）、「自己実現&社会」における母数となる文章の親件数は296件（総記事数は未確認）である。まずは、これらについて、名詞・動詞・形容句（形容詞と形容動詞）の3つの切り口から、テキストマイニングソフトによるランキング化を進めていきたい。

A 名詞における随伴的単語の出現頻度の全体的状況

全期間（1917～2009年）を対象として、「自己実現」グループと「自己実現&社会」グループとの比較的観点を意識しながら、名詞のみを取り出して単語ランキングを作成して表にしたものが、【図表1-1】である³⁾。

このランキング表を見る際に注意すべきことは、それ自体を抽出することを目的とされた単語は、自ずとテキストマイニングのカウント数としても100%に近づくということである。「自己実現」における名詞ランキングにおいては、「自己実現」を含む文章数が1位（2121件、件数頻度91.27%、2139回出現）となっているけれども、実質的な1位は、この表では2位（296件、件数頻度12.74%、331回出現）の「社会」だということになり、以後の実質的な順位を1つずつ上げて考えるべきだという話になる。同様に、「自己実現&社会」における名詞ランキングにおいては、「社会」を含む文章数が1位（296件、件数頻度100.0%、331回出現）、「自己実現」を含む文章数が2

【図表 1-1】日本語「自己実現」に付随する名詞の登場頻度ランキングの比較

「自己実現」における名詞										「自己実現 & 社会」における名詞				
総文章件数:2324件										総文章件数:296件				
順位	単語	件数 (件)	頻度 (%)	出現数 (回)	順位	単語	件数 (件)	頻度 (%)	出現数 (回)	順位	単語	件数 (件)	頻度 (%)	出現数 (回)
1	自己実現	2121	91.27	2139	51	一人	32	1.38	32	1	社会	296	100.00	331
2	社会	296	12.74	331	51	学習	32	1.38	33	2	自己実現	272	91.89	280
3	女性	221	9.51	256	53	学生	31	1.33	35	3	女性	52	17.57	61
4	仕事	202	8.69	210	53	喜び	31	1.33	32	4	参加	37	12.50	37
5	人	201	8.65	215	53	機会	31	1.33	31	5	人	28	9.46	28
6	自分	170	7.31	195	53	生きがい	31	1.33	31	6	個人	24	8.11	25
7	場	161	6.93	173	57	意欲	30	1.29	31	7	中	22	7.43	23
8	子ども	133	5.72	146	58	意味	29	1.25	31	8	子ども	20	6.76	24
9	自己	102	4.39	109	58	自己実現(否定)	29	1.25	29	9	自分	19	6.42	22
10	中	96	4.13	101	60	自ら	28	1.20	28	10	貢献	18	6.08	19
11	教育	76	3.27	87	60	日本	28	1.20	28	10	仕事	18	6.08	19
11	個人	76	3.27	81	62	家族	27	1.16	27	12	高齢者	16	5.41	19
13	人生	70	3.01	71	62	言葉	27	1.16	27	13	人間	14	4.73	16
14	人間	68	2.93	71	62	趣味	27	1.16	27	14	家庭	13	4.39	13
15	能力	65	2.80	66	62	生涯	27	1.16	29	14	教育	13	4.39	15
16	育児	63	2.71	71	62	組織	27	1.16	27	14	目的	13	4.39	13
17	生活	60	2.58	61	67	時間	26	1.12	28	17	今	12	4.05	12
18	活動	58	2.50	63	67	尊敬	26	1.12	26	17	自立	12	4.05	12
19	参加	57	2.45	57	69	ひとり	25	1.08	25	17	生活	12	4.05	12
20	男性	55	2.37	60	69	可能性	25	1.08	25	17	男性	12	4.05	13
21	夢	53	2.28	53	69	学校	25	1.08	27	21	意識	11	3.72	11
22	時代	52	2.24	52	69	自己実現型	25	1.08	25	21	育児	11	3.72	13
23	私	51	2.19	55	73	キャリア	24	1.03	25	21	活動	11	3.72	14
23	母親	51	2.19	57	73	そこ	24	1.03	24	21	企業	11	3.72	11
25	テーマ	50	2.15	52	73	価値観	24	1.03	24	21	欲求	11	3.72	11
26	会社	48	2.07	55	73	社員	24	1.03	25	26	自己	10	3.38	12
26	個性	48	2.07	49	73	男女	24	1.03	26	26	心	10	3.38	10
26	自立	48	2.07	48	73	必要	24	1.03	24	26	生き方	10	3.38	10
26	若者	48	2.07	50	73	表現	24	1.03	24	26	日本	10	3.38	10
30	今	46	1.98	46	73	方法	24	1.03	24	30	テーマ	9	3.04	9
30	手段	46	1.98	48	81	ケア	23	0.99	24	30	環境	9	3.04	10
32	道	44	1.89	45	81	経験	23	0.99	23	30	障害者	9	3.04	11
33	家庭	42	1.81	43	81	結婚	23	0.99	23	30	場	9	3.04	9
33	地域	42	1.81	45	81	貢献	23	0.99	24	30	進出	9	3.04	9
35	ボランティア	41	1.76	44	81	職場	23	0.99	23	30	人生	9	3.04	9
35	企業	41	1.76	42	81	労働	23	0.99	28	30	尊敬	9	3.04	9
37	目的	40	1.72	40	87	一つ	22	0.95	22	37	機会	8	2.70	8
38	意識	39	1.68	41	87	課題	22	0.95	22	37	自己実現型	8	2.70	8
38	世代	39	1.68	41	87	現代	22	0.95	22	37	手段	8	2.70	8
38	生き方	39	1.68	40	87	自由	22	0.95	25	37	世代	8	2.70	8
41	高齢者	38	1.64	42	87	将来	22	0.95	22	37	生涯	8	2.70	9
41	障害者	38	1.64	45	92	講座	21	0.90	24	37	能力	8	2.70	8
41	心	38	1.64	42	92	国	21	0.90	21	43	学習	7	2.36	8
41	欲求	38	1.64	48	92	理由	21	0.90	22	43	原則	7	2.36	7
45	生徒	37	1.59	41	95	姿	20	0.86	21	43	若者	7	2.36	7
46	環境	36	1.55	38	95	支援	20	0.86	23	43	世界	7	2.36	7
46	力	36	1.55	38	95	主婦	20	0.86	20	43	生きがい	7	2.36	7
48	問題	35	1.51	36	95	就職	20	0.86	20	43	男女	7	2.36	8
49	世界	33	1.42	33	95	障害	20	0.86	21	43	母親	7	2.36	8
49	目標	33	1.42	35	100	市民	19	0.82	21	43	問題	7	2.36	7

※「自己実現」においては上位100位までを、「自己実現 & 社会」においては上位50位までを機械的に並べている。

位（272件、件数頻度91.89%、280回出現）となっているけれども、この表では3位（52件、件数頻度17.57%、61回出現）の「女性」が実質的な1位だということになり、以後の実質的な順位を2つずつ上げて考えるべきだという話になる。よって、「自己実現&社会」グループの名詞ランキングにおいては、たとえば12位の「高齢者」（16件、件数頻度5.41%、19回出現）が実質的な10位という話になる。

それでは、実際に、この名詞ランキングを考察してみよう。ここでは、注目すべき諸々の単語について、三つのグループに仕分けしながら抽出していくことにする。第一グループは、「自己実現&社会」という条件付けがなされることによって、頻度が目立って増えてくるものである。第二グループは、「自己実現&社会」という条件付けがなされても、元々高かった頻度により変化が見られないものである。第三グループとして、「自己実現」を含む一般文章においては頻度が高かったのにもかかわらず、「自己実現&社会」という条件付けがなされることによって頻度が目立って減ってしまったものを指摘する。

第一のグループとして、まず何より、諸々の自己実現言説のうち「社会」を含むという条件が付くからこそ突出して頻度が増える単語には、特段の注目をする必要がある。そして、その代表格が「参加」と「貢献」であり、これらの「社会」との密接な関係が再確認できる⁴⁾。

まず、「参加」については、【図表1-1】を見ればわかるように、「自己実現」では19位（文章件数57件、件数頻度2.45%、57回出現）にすぎなかったのにもかかわらず、「自己実現&社会」では実質的な2位に相当する4位（文章件数37件、件数頻度12.50%、37回出現）となっていて、一気に順位が15位も上っている。件数頻度を基準とした言い方をすれば、「参加」は「自己実現」で2.45%にすぎなかったのに、「自己実現&社会」では12.50%になり、出現する割合が5倍以上（12.50%/2.45%）も増加していることになる。実際、「自己実現&社会」における「参加」の文章件数の37件は、「自己実現」という条件のみがついて抽出された「参加」の文章件数の57件を基準にすれば、約65%（37件/57件）も占めていて、極めて特徴的な単語だとして特筆できる。

同様のことが「貢献」についても言える。【図表1-1】を見ればわかるように、「自己実現」では81位（文章件数23件、件数頻度0.99%、24回出現）にすぎなかったのにもかかわらず、「自己実現&社会」では実質的な8位に相当する10位（文章件数18件、件数頻度6.08%、19回出現）であり、一気に順位が71位も上がり、飛躍的な上昇を見せている。件数頻度を基準とした言い方をすれば、「貢献」の出現頻度は、「自己実現」で0.99%にすぎなかったのにもかかわらず、「自己実現&社会」では6.08%になり、出現する割合が6倍以上（6.08%/0.99%）も増加している。実際、「自己実現&社会」における「貢献」の文章件数の18件は、「自己実現」という条件のみがついて抽出された「貢献」の文章件数の23件を基準にした場合、約78%（18件/23件）も占めている。見方を変えれば、自己実現言説において「貢献」という単語を見かけた場合は、ほぼ八割方「社会」という単語も同時に見つけられるという事態が起きていることを意味するのである。

また、これらの単語ほど高い順位に上がるまでに際だつてはいないが、第一グループに属する単語として扱うべきものを指摘したい。「高齢者」・「家庭」・「目的」は、「社会」とともに用いられているケースで顕著に目立つようになった単語だとみなせる。「自己実現」では41位（文章件数38件、件数頻度1.64%、42回出現）にすぎなかった「高齢者」は、「自己実現&社会」では実質的な10位の12位（文章件数16件、件数頻度5.41%、19回出現）で29ランクも上昇し、出現割合が約3.3倍（5.41%/1.64%）になっているとともに、自己実現言説において「高齢者」を含む全文章件数38件のうち

の約42%（16件／38件）を占めている。「自己実現」では33位（文章件数42件、件数頻度1.81%、43回出現）にすぎなかった「家庭」は、「自己実現&社会」では14位（文章件数13件、件数頻度4.39%、13回出現）で19ランクも上昇し、出現割合も約2.4倍（4.39%／1.81%）になっている。「自己実現」では37位（文章件数40件、件数頻度1.72%、40回出現）の「目的」は、「自己実現&社会」では14位（文章件数13件、件数頻度4.39%、13回出現）で23ランクも上昇し、出現割合も約2.6倍（4.39%／1.72%）になっている。

さらに、元々の順位が高かったので、順位それ自体はさほど上がっていないが、「自己実現&社会」という条件が付与されて明らかに存在感が増した単語を指摘できる。まず、「自己実現」では11位（文章件数76件、件数頻度3.27%、81回出現）の「個人」は、「自己実現&社会」では実質4位の6位（文章件数24件、件数頻度8.11%、25回出現）にまで順位を上げ、出現割合も約2.5倍（8.11%／3.27%）になっている。また、改めて確認すると、「自己実現」においては、2位の「社会」（文章件数296件、件数頻度12.74%、331回出現）に続いて3位（文章件数221件、件数頻度9.51%、256回出現）に位置する「女性（女、おんな、彼女）」は、「自己実現&社会」でも3位（文章件数52件、件数頻度17.57%、61回出現）であり、「自己実現」と「社会」を除外して考えれば実質的な1位となる頻出単語である。「女性（女、おんな、彼女）」については、順位の変動よりもむしろ出現割合に注目すべきであり、「自己実現」における出現割合の9.51%が、「自己実現&社会」においては2倍近くの17.57%まで上昇している。つまり、「女性」に直に関わる言葉は、「社会」を伴う自己実現言説の6件に1件以上の割合（17.57%）で随伴するのである。

では、第二グループに属するものとして、「自己実現」であろうが「自己実現&社会」であろうが、どちらにおいても上位を維持している頻出名詞を抽出し直しておくならば、どのような単語を指摘できるだろうか。「自己実現」では5位（文章件数201件、件数頻度8.69%、215回出現）の「人（人々）」は、「自己実現&社会」でも5位（文章件数28件、件数頻度9.46%、28回出現）であり、「自己実現」と「社会」との2語を除いた場合の実質的な3位に位置し、上位を維持している。「中（なか）」は、「自己実現」では10位（文章件数96件、件数頻度4.13%、101回出現）であるが、「自己実現&社会」では7位（文章件数22件、件数頻度7.43%、23回出現）であり、実質的な5位として順位を上げているとみなせるが、ここでは上位を現状維持しているという側面を強調しておこう。「子ども（子供、こども、子、児童）」は、「自己実現」では8位（文章件数133件、件数頻度5.72%、146回出現）であるが、「自己実現&社会」でも8位（文章件数20件、件数頻度8.11%、24回出現）であり、上位に位置したままである。「教育」は、「自己実現」では12位（文章件数76件、件数頻度3.27%、87回出現）であり、「自己実現&社会」では14位（文章件数13件、件数頻度4.39%、15回出現）になり、実質的な12位として順位がほぼ変わらないまま、頻度については3.27%から4.39%へと上昇している。「自己実現&社会」では13位（文章件数14件、件数頻度4.73%、16回出現）で、実質的には11位に相当する「人間」は、元々「自己実現」でも14位（文章件数68件、件数頻度2.93%、71回出現）といった上位に位置していた単語であり、頻度が2.93%から4.73%へと2ポイント近く上がっている。

たしかに、これらは、少なくとも量的な次元では、「社会」という言葉が同時に用いられていることにより特徴化したとは言いがたい単語である。だが、これら第二グループの単語群を無視してよいわけではなく、直に記事を読み込むといった違った角度の分析を加えることにより、それらの名詞群が「社会」という磁場に影響された自己実現言説であるがゆえの特徴を見せ出す可能性が十

分にある。

最後に、第三グループに属するとみなせる名詞を指摘する。これらは、第一グループおよび第二グループの用語とは極めて対照的に、「社会」という条件が付加されることにより順位を著しく下げているものである。それに相当するのは、「場」と「自己」である。「自己実現」では7位（文章件数161件、件数頻度6.93%、173回出現）の「場」は、「自己実現&社会」では30位（文章件数9件、件数頻度3.04%、9回出現）であり、順位を23ランクも下げている。「自己実現」では9位（文章件数102件、件数頻度4.39%、109回出現）の「自己」は、「自己実現&社会」では26位（文章件数10件、件数頻度3.38%、12回出現）にまで下がっており、頻出単語としての存在感が薄くなった。これらの単語の状況変化についての推察にすぎないことだが、「場（場所）」と同様に「社会」にも空間的意味合いがある点で文脈的に重なるために同時に用いられにくい可能性や、「自己」が個人的な意味合いになって「社会」とは別次元の話にみなされている可能性があると思われる。

加えて、一見して上位に踏みとどまっているように見える「仕事」という名詞も、「社会」に随伴する単語としては、その頻度を著しく下げているものとして扱うべきである。「仕事」は、「自己実現」では実質3位の4位（文章件数202件、件数頻度8.69%、210回出現）だったのにもかかわらず、「自己実現&社会」では実質8位の10位（文章件数18件、件数頻度6.08%、19回出現）であり、順位が下がるとともに、出現する頻度も8.69%から6.08%へと2.61ポイントも落ちている。「仕事」は、かろうじてベスト10圏内を維持しているとはいえ、「自己実現&社会」という条件がつくことによってこそ出現頻度が増えた上位単語が多いという事実を鑑みれば、なぜ出現割合が減ってしまったのかが問われるべき注目単語になるだろう。他には、「自己実現」では6位（文章件数170件、件数頻度7.31%、195回出現）であった「自分」は、「自己実現&社会」では9位（文章件数19件、件数頻度6.42%、22回出現）にまで順位を下げ、件数頻度も7.31%から6.42%へと1ポイント近く下がった。

B 動詞における随伴的単語の出現頻度の全体的状況

全期間（1917～2009年）を対象として、「自己実現」グループと「自己実現&社会」グループとの比較的观点を意識しながら、動詞のみを取り出して単語ランキングを作成して表にしたものが、【図表1-2】である。なお、動詞ランキングには、名詞たる「自己実現」と「社会」は入ってこないで、これらの単語によるランキングの変動は原理的に生じない。

これを見れば明らかなように、「ある」・「目指す（めざす）」・「図る（はかる）」・「思う」・「考える」・「持つ（もつ）」・「求める」・「働く」・「言う」・「生きる」・「通じる」といった、「自己実現」において上位10位以内に位置する動詞は、「自己実現&社会」においても、どれも15位の外に出ることはない。この意味で、動詞のランキングについては、「自己実現」と「自己実現&社会」とでは基本的に大きな違いはない。

しかしながら、「貢献する」という動詞は、極めて目立った頻度上昇を見せる単語として、特筆に値する。「貢献する」は、「自己実現」では29位（文章件数22件、件数頻度0.95%、22回出現）にすぎなかったのにもかかわらず、「自己実現&社会」では9位（文章件数13件、件数頻度4.39%、13回出現）へと20ランクも上がっているのみならず、件数頻度が0.95%から4.39%へと5倍近くも高くなっているように、頻出動詞と化している。実際、「自己実現&社会」における「貢献する」の13件は、「自己実現」全体における「貢献する」の全体件数22件の約60%（13件／22件）を占め

【図表 1-2】日本語「自己実現」に付随する動詞の登場頻度ランキングの比較

「自己実現」における動詞										「自己実現&社会」における動詞				
総文章件数:2324件										総文章件数:296件				
順位	単語	件数 (件)	頻度 (%)	出現数 (回)	順位	単語	件数 (件)	頻度 (%)	出現数 (回)	順位	単語	件数 (件)	頻度 (%)	出現数 (回)
1	ある	215	9.25	230	51	違う	15	0.65	15	1	ある	32	10.81	33
2	目指す	132	5.68	134	51	開く	15	0.65	15	2	図る	28	9.46	28
3	図る	130	5.59	134	51	掲げる	15	0.65	15	3	目指す	25	8.45	26
4	思う	119	5.12	122	51	向かう	15	0.65	15	4	持つ	17	5.74	18
5	考える	117	5.03	118	51	進む	15	0.65	15	5	考える	16	5.41	16
6	持つ	110	4.73	112	51	進める	15	0.65	15	6	求める	15	5.07	15
7	求める	95	4.09	95	51	生まれる	15	0.65	15	6	言う	15	5.07	16
8	働く	89	3.83	93	51	訴える	15	0.65	15	8	働く	14	4.73	14
9	言う	76	3.27	78	51	尊重する	15	0.65	15	9	できる	13	4.39	13
10	生きる	60	2.58	63	51	知る	15	0.65	15	9	貢献する	13	4.39	13
10	通じる	60	2.58	60	61	願う	14	0.60	14	11	通じる	12	4.05	12
12	できる	57	2.45	58	61	指摘する	14	0.60	14	12	果たす	11	3.72	11
13	する	52	2.24	52	61	取り組む	14	0.60	14	12	思う	11	3.72	11
14	増える	46	1.98	47	61	評価する	14	0.60	14	14	生きる	9	3.04	9
15	果たす	40	1.72	40	65	できる(否定)(否定)	13	0.56	13	15	つくる	8	2.70	8
15	感じる	40	1.72	40	65	活用する	13	0.56	13	15	実現する	8	2.70	8
17	やる	39	1.68	41	65	見いだす	13	0.56	13	15	重視する	8	2.70	8
17	通す	39	1.68	39	65	行う	13	0.56	14	15	通す	8	2.70	8
19	いる	37	1.59	37	65	参加する	13	0.56	13	19	とらえる	7	2.36	7
20	つながる	29	1.25	29	65	望む	13	0.56	13	19	支える	7	2.36	8
21	向ける	28	1.20	28	71	わかる	12	0.52	12	19	出る	7	2.36	7
21	実現する	28	1.20	28	71	過ごす	12	0.52	12	22	安心する	6	2.03	6
21	出る	28	1.20	28	71	自立する	12	0.52	12	22	掲げる	6	2.03	6
24	支援する	27	1.16	27	71	書く	12	0.52	12	22	参加する	6	2.03	6
25	話す	26	1.12	26	71	続ける	12	0.52	12	22	示す	6	2.03	6
26	つくる	24	1.03	24	71	達成する	12	0.52	12	22	変わる	6	2.03	6
26	見る	24	1.03	24	77	応じる	11	0.47	12	22	与える	6	2.03	6
28	支える	23	0.99	24	77	頑張る	11	0.47	11	28	いる	5	1.69	5
29	とらえる	22	0.95	22	77	成長する	11	0.47	11	28	やる	5	1.69	5
29	貢献する	22	0.95	22	77	促す	11	0.47	11	28	育てる	5	1.69	6
29	受ける	22	0.95	23	77	努力する	11	0.47	11	28	作る	5	1.69	5
32	楽しむ	21	0.90	21	77	入る	11	0.47	11	28	指摘する	5	1.69	5
32	生かす	21	0.90	21	77	抱える	11	0.47	11	28	支援する	5	1.69	5
32	得る	21	0.90	21	84	あげる	10	0.43	10	28	増える	5	1.69	5
35	選ぶ	20	0.86	20	84	くる	10	0.43	10	28	尊重する	5	1.69	5
35	発揮する	20	0.86	20	84	見える	10	0.43	10	36	する	4	1.35	4
35	与える	20	0.86	20	84	高まる	10	0.43	10	36	学ぶ	4	1.35	4
38	見つける	19	0.82	19	84	実感する	10	0.43	10	36	活用する	4	1.35	4
38	示す	19	0.82	19	84	信じる	10	0.43	10	36	感じる	4	1.35	4
38	重視する	19	0.82	19	84	追求する	10	0.43	10	36	見える	4	1.35	4
41	つける	18	0.77	18	84	模索する	10	0.43	10	36	語る	4	1.35	5
41	育てる	18	0.77	19	84	役立てる	10	0.43	10	36	使う	4	1.35	4
41	高める	18	0.77	18	93	安心する	9	0.39	9	36	取り組む	4	1.35	4
41	述べる	18	0.77	18	93	位置づける	9	0.39	9	36	進む	4	1.35	4
41	変わる	18	0.77	19	93	育つ	9	0.39	9	36	続ける	4	1.35	4
46	作る	17	0.73	17	93	援助する	9	0.39	9	36	置く	4	1.35	4
46	使う	17	0.73	17	93	強まる	9	0.39	9	36	得る	4	1.35	4
46	描く	17	0.73	17	93	言う(否定)	9	0.39	9	36	保障する	4	1.35	4
49	学ぶ	16	0.69	17	93	考える(否定)	9	0.39	9	36	暮らす	4	1.35	4
49	語る	16	0.69	18	93	始める	9	0.39	9	50	くる	3	1.01	3

※「自己実現」においては上位100位までを、「自己実現&社会」においては上位50位までを機械的に並べている。

ている。言い換えれば、「貢献する」という動詞が出現する場合には、同時に「社会」という名詞も用いられている可能性が高いというわけである⁵⁾。

なお、ここでは、方法論的手順として量的次元の議論のみに焦点を絞りたいので、「貢献する」に関連して具体的な文例を挙げて、その解釈を深めることはあえてしない。だが、量的次元の考察が基盤となった質的研究は、質的研究だけを単独で深めようとしているときには決して気づけなかったと思われる発見をもたらしてくれるような可能性をふんだんに秘めていることを強調しておきたい。研究手法としてテキストマイニングを活用することは、量的研究と質的研究とを統合するとまで言ってしまってはおこがましいけれども、それ自体が両者を混合させるやり方を実現させてくれるのみならず、量的研究を質的研究へと効果的に接合することにより、前者を土台にして後者を豊かに花開かせてくれるものだと言い切れるのである。

C 形容語における随伴的単語の出現頻度の全体的状況

全期間（1917～2009年）を対象として、「自己実現」グループと「自己実現&社会」グループとの比較的観点を意識しながら、形容詞・形容動詞を主とした形容語のみを取り出して単語ランキングを作成したものが、【図表1-3】である。なお、形容語（形容詞・形容動詞）のみのランキングにおいても、名詞たる「自己実現」と「社会」とが入ってくることは原理的にないので、動詞のみのランキングと同様に、順位の上げ下げに直接的に影響を与えられることはない。

この表を見れば明らかなように、詳細は省くが、形容語においても、上位の顔ぶれにそれほど大きな変化はない。「自己実現」において上位10位以内に位置する形容詞および形容動詞である「大切だ（重要だ、大事だ、大切）」・「多様だ（様々だ、さまざま、色々だ、多彩だ）」・「多い」・「ない」・「強い」・「豊かだ」・「良い（いい、よい、よりよい）」・「新しい」・「必要だ」・「高い」は、形容語としての抽出数が少ない「自己実現&社会」においても、どれも基本的に20位以内に位置している。つまり、自己実現言説において「社会」という付帯条件が加わったからといって、形容語の動向に大きな影響が出てくるというわけではないのである。

だが、単語ランキングよりもむしろ件数頻度に注目すれば、「自己実現&社会」ゆえの特徴的な形容語をいくつか指摘できる。その代表格は、「自己実現」で5位（文章件数40件、件数頻度1.72%、40回出現）を占めるような頻出単語でもあった「豊かだ」という形容動詞である。この単語は、「自己実現&社会」では1位（文章件数14件、件数頻度4.73%、14回出現）へと躍り出ているのみならず、件数頻度が2.75倍（4.73%/1.72%）になっている。

なお、ここでは方法論的手順の都合上あえて禁欲するけれども、こうした事態はどのようなことを意味するかということや、なぜこのようなことが起きるのかについて解明するには、具体的な文章に当たってみるのがやはり効果的である。そうすれば、現代的な意味における「自己実現」が「物質的に豊かな社会」の成立・成熟を大前提としてはじめて社会全体の課題と化したのではないとか、「自己実現」が「心の豊かさを重視する社会」を象徴する概念だという側面があるのではないか、さらには「自己実現」が「モノの豊かさ」から「ココロの豊かさ」への移行期を象徴して登場した可能性もあるのではないかというような仮説を立ててみて、それがどの程度まで妥当かを検証することができるのである。研究方法論的に抽象度を高めた言い方をすれば、諸々の質的データを量的に整理するという補助作業が、全体状況を見すえながら個々の文章を解釈するという質的アプローチを豊かにする基盤となるのである。

【図表 1-3】日本語「自己実現」に付随する形容語の登場頻度ランキングの比較

「自己実現」における形容語										「自己実現＆社会」における形容語				
総文章件数:2324件										総文章件数:296件				
順位	単語	件数 (件)	頻度 (%)	出現数 (回)	順位	単語	件数 (件)	頻度 (%)	出現数 (回)	順位	単語	件数 (件)	頻度 (%)	出現数 (回)
1	大切だ	69	2.97	69	41	望ましい	5	0.22	5	1	豊かだ	14	4.73	14
2	多様だ	54	2.32	55	41	明確だ	5	0.22	5	2	多様だ	11	3.72	11
3	多い	48	2.07	48	41	面白い	5	0.22	5	3	大切だ	8	2.70	8
4	ない	43	1.85	43	54	いけない	4	0.17	4	4	強い	5	1.69	5
5	強い	40	1.72	40	54	このようだ	4	0.17	4	5	自由だ	4	1.35	4
5	豊かだ	40	1.72	40	54	そのようだ	4	0.17	4	5	大きい	4	1.35	4
7	良い	34	1.46	34	54	一方的だ	4	0.17	4	5	必要だ	4	1.35	4
8	新しい	32	1.38	33	54	困難だ	4	0.17	4	8	ない	3	1.01	3
9	必要だ	28	1.20	29	54	自己実現だ	4	0.17	4	8	確かだ	3	1.01	3
10	高い	22	0.95	23	54	十分だ	4	0.17	4	8	健やかだ	3	1.01	3
11	大きい	20	0.86	21	54	生き生き	4	0.17	4	8	好きだ	3	1.01	3
12	若い	19	0.82	19	54	乏しい	4	0.17	4	8	高い	3	1.01	4
13	積極的だ	17	0.73	17	63	いろいろ	3	0.13	3	8	若い	3	1.01	3
14	好きだ	16	0.69	17	63	じっくり	3	0.13	3	8	少ない	3	1.01	3
14	自由だ	16	0.69	16	63	しんどい	3	0.13	3	8	多い	3	1.01	3
16	楽しい	13	0.56	13	63	ほっと	3	0.13	3	8	望ましい	3	1.01	3
16	難しい	13	0.56	13	63	悪い	3	0.13	3	8	良い	3	1.01	3
18	経済的だ	12	0.52	12	63	何だ	3	0.13	3	18	ふさわしい	2	0.68	2
19	うまい	11	0.47	11	63	簡単だ	3	0.13	3	18	急速だ	2	0.68	2
19	具体的だ	11	0.47	11	63	基本的だ	3	0.13	3	18	具体的だ	2	0.68	2
21	可能だ	10	0.43	10	63	狭い	3	0.13	3	18	根強い	2	0.68	2
21	少ない	10	0.43	10	63	軽い	3	0.13	3	18	社会的だ	2	0.68	2
21	新ただ	10	0.43	10	63	懸命だ	3	0.13	3	18	新しい	2	0.68	2
24	確かだ	9	0.39	9	63	個人的だ	3	0.13	3	18	難しい	2	0.68	2
25	元気だ	8	0.34	8	63	高度だ	3	0.13	3	18	貧しい	2	0.68	2
25	厳しい	8	0.34	8	63	寂しい	3	0.13	3	18	不可欠だ	2	0.68	2
25	社会的だ	8	0.34	8	63	主体的だ	3	0.13	3	18	明るい	2	0.68	2
25	精神的だ	8	0.34	8	63	柔軟だ	3	0.13	3	28	いけない	1	0.34	1
29	幸福だ	7	0.30	7	63	鮮明だ	3	0.13	3	28	きめ細かい	1	0.34	1
29	小さい	7	0.30	7	63	尊厳だ	3	0.13	3	28	グロテスクだ	1	0.34	1
29	美しい	7	0.30	7	63	対等だ	3	0.13	3	28	このようだ	1	0.34	1
32	しっかり	6	0.26	6	63	程遠い	3	0.13	3	28	しっかり	1	0.34	1
32	どのようだ	6	0.26	7	63	熱い	3	0.13	3	28	じゅうぶんだ	1	0.34	1
32	どんどん	6	0.26	6	63	不可欠だ	3	0.13	3	28	しんどい	1	0.34	1
32	ふさわしい	6	0.26	6	63	文化的だ	3	0.13	3	28	すばらしい	1	0.34	1
32	ほしい(否定)	6	0.26	6	63	明らかなだ	3	0.13	3	28	ぜいたくだ	1	0.34	1
32	何か	6	0.26	6	63	欲しい(否定)	3	0.13	3	28	たくましい	1	0.34	1
32	広い	6	0.26	6	63	理想的だ	3	0.13	3	28	どんどん	1	0.34	1
32	真剣だ	6	0.26	6	89	うらやましい	2	0.09	2	28	はつらつたる	1	0.34	1
32	長い	6	0.26	6	89	うろろ	2	0.09	2	28	はるかだ	1	0.34	1
41	快適だ	5	0.22	5	89	おぼつかない	2	0.09	2	28	ほど遠い	1	0.34	1
41	健やかだ	5	0.22	5	89	お互い	2	0.09	2	28	まともだ	1	0.34	1
41	幸せだ	5	0.22	5	89	かわいそうだ	2	0.09	2	28	やさしい	1	0.34	1
41	根強い	5	0.22	5	89	きめ細かい	2	0.09	2	28	ロジカルだ	1	0.34	1
41	自然だ	5	0.22	5	89	しなやかだ	2	0.09	2	28	わがままで(否定)	1	0.34	1
41	深い	5	0.22	5	89	たくましい	2	0.09	2	28	安全だ	1	0.34	1
41	身近だ	5	0.22	5	89	ちゃんと	2	0.09	2	28	異常だ	1	0.34	1
41	素晴らしい	5	0.22	5	89	つらい	2	0.09	2	28	下手だ	1	0.34	1
41	貧しい	5	0.22	5	89	ない(否定)	2	0.09	2	28	可能だ	1	0.34	1
41	平等だ	5	0.22	5	89	はるかだ	2	0.09	2	28	快適だ	1	0.34	1

※「自己実現」においては上位100位までを、「自己実現＆社会」においては上位50位までを機械的に並べている。

Ⅱ 自己実現言説における「社会」に随伴する単語の時代的動向

日本語「自己実現」について語った言説において「社会」という言葉も同時に用いている文章は、合計296件である。これまでは、「自己実現&社会」という条件付きで、全時代にわたってまんべんなく量的に多いものを踏まえた。今度は、時代的特徴を示す単語を明らかにしていこう。

A 「社会」を含む自己実現言説の量的変化

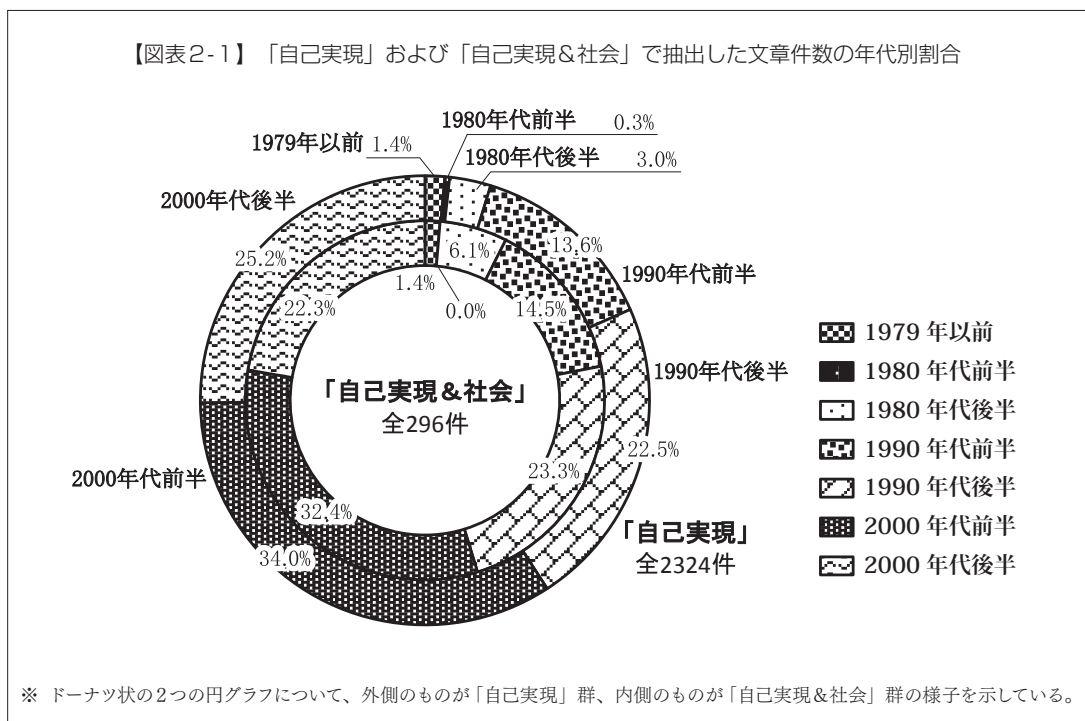
言説の時代的特徴を捉えるに当たって、目安として時代区分の設定が求められる。具体的には、1970年代以前（1917～1979年）の長期間を除いて、5年単位で把握することにしたい。つまり、1980年代以降の時代区分については、1980年代前半（1980～1984年）、1980年代後半（1985～1989年）、1990年代前半（1990～1994年）、1990年代後半（1995～1999年）、2000年代前半（2000～2004年）、2000年代後半（2005～2009年）の6つに区切ることを基本とする。

まずは、「自己実現」グループに関する量的情報を再確認しておきたい。本研究に用いている全時代（1917～2009年）において分析対象とされた1833件の新聞記事等は、「自己実現」を含むデータとして認識された文章数で2324文と数え直されているが、この数字を大本の基準にして、自己実現言説を量的に取り扱うことにする⁶⁾。全時代における「自己実現」を含む総文章数2324件の時代ごとの内訳を再確認すると、1970年代以前で33件（記事数は14件）、1980年代前半で8件（記事数は5件）、1980年代後半で69件（記事数は54件）、1990年代前半で317件（記事数は224件）、1990年代後半で522件（記事数は437件）、2000年代前半で790件（記事数は623件）、2000年代後半で585件（記事数は476件）という結果になった⁷⁾。これを、全時代における文章件数の2324件を100%として基準にした割合として把握し直すならば、1970年代以前は1.4%（33件／2324件）、1980年代前半は0.3%（8件／2324件）、1980年代後半は3.0%（69件／2324件）、1990年代前半は13.6%（317件／2324件）、1990年代後半は22.5%（522件／2324件）、2000年代前半は34.0%（790件／2324件）、2000年代後半は25.2%（585件／2324件）を占めるという具合である。つまり、本研究の元データとしての自己実現言説は、2000年代以降のものが全時代（1917～2009年）の6割（59.2%＝34.0%＋25.2%）を占めているということである。この結果は、「自己実現」という日本語が2000年代以降に特に頻繁に用いられるような日常語と化したと判断してよい根拠ともなろう。

次に、「社会」を含む自己実現言説の件数について確認しておくと、総件数で296件（記事数は未確認）である。全時代における「自己実現&社会」を含む文章数の時代ごとの内訳を再確認すると、1970年代以前で4件、1980年代前半で0件、1980年代後半で18件、1990年代前半で43件、1990年代後半で69件、2000年代前半で96件、2000年代後半で66件という結果になった。ここで、見方を変えると、全時代（1917～2009年）の「自己実現&社会」の296件のうち、1970年代以前の「自己実現&社会」は4件であり、その1.4%（4件／296件）を占めることになる。1980年代について言えば、前半（1980～1984年）では0件（0.00%）であり、「自己実現&社会」の空白期間が存在することになるが、後半（1985～1989年）になれば18件がカウントされ、全時代（1917～2009年）の「自己実現&社会」の全296件のうち、その6.1%（18件／296件）を占めることになる。1990年代については、前半（1990～1994年）の「自己実現&社会」は43件で、全時代の14.5%（43件／296件）を占め、後半（1995～1999年）は増加して69件となり、全時代の23.3%（69件／296件）を占めるに至っている。2000年代については、前半（2000～2004年）に「自己実現&社会」の件

数はピークを迎えて96件まで増加し、全時代の32.4%（96件／296件）を占めるにまで到るが、後半（2005～2009年）には減少傾向に転じ66件となり、全時代の22.3%（66件／296件）を占める程度に収まっている。

実は、この傾向は、「自己実現」という単語を含む言説の全体の時代的傾向と、極めて類似している。全体の割合について、「自己実現」に対する「自己実現&社会」の数字を対比的に示せば、1970年代以前の1.4%に対する1.4%、1980年代前半の0.3%に対する0.0%、1980年代後半の3.0%に対する6.1%、1990年代前半の13.6%に対する14.5%、1990年代後半の22.5%に対する23.3%、2000年代前半の34.0%に対する32.4%、2000年代後半の25.2%に対する22.3%、という具合になっている。【図2-1】は、この状況をグラフ化して見やすくしたものである。極めて直感的な言い方になるが、時代ごとの「社会」に関する自己実現言説の歴史的登場の仕方は、自己実現言説の一般的なものの登場割合とほぼ連動しているとみなせそうである。つまり、もっとも単純に量的次元に限って言えば、「自己実現」グループと「自己実現&社会」グループとでは、基本的には違いを強調しにくいというわけである。



B 「社会」を含む自己実現言説の時代的キーワード

ここまで見てきたように、量的次元では、「社会」という付帯条件が付け加わったところで、自己実現言説の歴史的登場の仕方あまり変化が起きてこないようである。だが、このことは、質的次元でも、自己実現言説の歴史的状況までも変化しないことを意味するのだろうか。この疑問に対する回答を確認するには、コンピュータ言語分析に基づいたテキストマイニング手法は大変に強力な武器になる。

それでは、「社会」を含む自己実現言説について、時代ごとの特徴を把握してみよう。ここでは、時代ごとの変化が顕著に表れやすい名詞ランキングに注目してみる。【図表2-2】は、全期間

【図表2-2】日本語「自己実現」含む文章に「社会」も付随するという条件を付して抽出できた名詞の時代ごとの単語ランキング

全時代(1917～2009年)					1979年代以前(1917～1979年)					1980年代前半(1980～1984年)					1980年代後半(1985～1989年)				
名詞					名詞					名詞					名詞				
総文章件数:296件					総文章件数:4件					総文章件数:0件					総文章件数:18件				
順位	単語	件数 (件)	頻度 (%)	出現数 (回)	順位	単語	件数 (件)	頻度 (%)	出現数 (回)	順位	単語	件数 (件)	頻度 (%)	出現数 (回)	順位	単語	件数 (件)	頻度 (%)	出現数 (回)
1	社会	296	100.00	331	1	自己実現	4	100.00	5						1	社会	18	100.00	19
2	自己実現	272	91.89	280	1	社会	4	100.00	4						2	自己実現	15	83.33	16
3	女性	52	17.57	61	3	教育	2	50.00	2						3	女性	4	22.22	4
4	参加	37	12.50	37	3	進化	2	50.00	2						3	生き方	4	22.22	4
5	人	28	9.46	28	3	六千年	2	50.00	2						4	仕事	3	16.67	3
6	個人	24	8.11	25	6	ざせつ	1	25.00	1						4	消費	3	16.67	3
7	中	22	7.43	23	6	ヒント	1	25.00	1						4	人間	3	16.67	4
8	子ども	20	6.76	24	6	マラソン	1	25.00	1						5	モノ	2	11.11	3
9	自分	19	6.42	22	6	一層	1	25.00	1						5	活動	2	11.11	3
10	貢献	18	6.08	19	6	宇佐見選手	1	25.00	1						5	感性	2	11.11	2
10	仕事	18	6.08	19	6	泳法	1	25.00	1						5	教育	2	11.11	3
12	高齢者	16	5.41	19	6	幾度	1	25.00	1						5	個性	2	11.11	2
13	人間	14	4.73	16	6	競争	1	25.00	1						5	指導	2	11.11	2
14	家庭	13	4.39	13	6	境地	1	25.00	1						5	自ら	2	11.11	2
14	教育	13	4.39	15	6	教養	1	25.00	1						5	自己	2	11.11	3
14	目的	13	4.39	13	6	鏡	1	25.00	1						5	自分	2	11.11	2
15	今	12	4.05	12	6	結論	1	25.00	1						5	人	2	11.11	2
15	自立	12	4.05	12	6	剣道	1	25.00	1						5	男性	2	11.11	2
15	生活	12	4.05	12	6	個人	1	25.00	1						5	論者	2	11.11	2
15	男性	12	4.05	13	6	挫折	1	25.00	1						20	1人	1	5.56	1
1990年代前半(1990～1994年)					1990年代後半(1995～1999年)					2000年代前半(2000～2004年)					2000年代後半(2005～2009年)				
名詞					名詞					名詞					名詞				
総文章件数:43件					総文章件数:69件					総文章件数:96件					総文章件数:66件				
順位	単語	件数 (件)	頻度 (%)	出現数 (回)	順位	単語	件数 (件)	頻度 (%)	出現数 (回)	順位	単語	件数 (件)	頻度 (%)	出現数 (回)	順位	単語	件数 (件)	頻度 (%)	出現数 (回)
1	社会	43	100.00	51	1	社会	69	100.00	76	1	社会	96	100.00	107	1	社会	66	100.00	74
2	自己実現	37	86.05	39	2	自己実現	62	89.86	62	2	自己実現	90	93.75	92	2	自己実現	64	96.97	66
3	女性	15	34.88	18	3	参加	12	17.39	12	3	女性	15	15.63	17	3	参加	12	18.18	12
4	個人	6	13.95	6	4	女性	11	15.94	15	4	個人	10	10.42	11	4	貢献	8	12.12	9
4	人	6	13.95	6	5	尊厳	8	11.59	8	4	参加	10	10.42	10	4	人	8	12.12	8
6	家庭	5	11.63	5	6	高齢者	7	10.14	8	4	子ども	10	10.42	11	6	仕事	7	10.61	8
6	企業	5	11.63	5	7	原則	6	8.70	6	5	中	8	8.33	9	6	女性	7	10.61	7
6	人間	5	11.63	6	7	自立	6	8.70	6	8	人	7	7.29	7	8	自分	6	9.09	6
9	男性	4	9.30	4	9	ケア	5	7.25	5	8	生活	7	7.29	7	8	中	6	9.09	6
9	中	4	9.30	4	9	個人	5	7.25	5	10	貢献	6	6.25	6	8	目的	6	9.09	6
9	余暇時間	4	9.30	4	9	人	5	7.25	5	10	自分	6	6.25	6	11	教育	5	7.58	6
12	ボランティア	3	6.98	3	9	世代	5	7.25	5	12	仕事	5	5.21	5	11	高齢者	5	7.58	6
12	機会	3	6.98	3	13	テーマ	4	5.80	4	12	自立	5	5.21	5	11	若者	5	7.58	5
12	今	3	6.98	3	13	自己	4	5.80	4	12	欲求	5	5.21	5	11	手段	5	7.58	5
12	子ども	3	6.98	4	13	人生	4	5.80	4	15	意識	4	4.17	4	15	経験	4	6.06	4
12	自由時間	3	6.98	3	13	生涯	4	5.80	4	15	価値観	4	4.17	4	15	場	4	6.06	4
12	手段	3	6.98	3	13	日本	4	5.80	4	15	家庭	4	4.17	4	17	育児	3	4.55	5
12	進出	3	6.98	3	18	アメリカ	3	4.35	3	15	環境	4	4.17	5	17	活動	3	4.55	3
12	本来	3	6.98	3	18	育児	3	4.35	3	15	今	4	4.17	4	17	企業	3	4.55	3
20	システム	2	4.65	2	18	環境	3	4.35	3	15	障害者	4	4.17	5	17	今	3	4.55	3
20	だれ	2	4.65	3	18	共生	3	4.35	3	15	日本	4	4.17	4	17	子ども	3	4.55	5
20	意識	2	4.65	2	18	国連	3	4.35	3	15	目的	4	4.17	4	17	自己	3	4.55	3
20	育児	2	4.65	2	18	子ども	3	4.35	3	23	テーマ	3	3.13	3	17	心	3	4.55	3
20	一つ	2	4.65	2	18	自己実現型	3	4.35	3	23	安心	3	3.13	3	17	世代	3	4.55	3
20	一員	2	4.65	2	18	自分	3	4.35	5	23	学校	3	3.13	3	17	生計	3	4.55	3
20	学習	2	4.65	3	18	男性	3	4.35	4	23	学習	3	3.13	3	17	能力	3	4.55	3
20	環境	2	4.65	2	18	中	3	4.35	3	23	活動	3	3.13	3	17	夢	3	4.55	3
20	企業内	2	4.65	2	18	独立	3	4.35	3	23	企業	3	3.13	3	17	力	3	4.55	3
20	個性	2	4.65	2	18	必要	3	4.35	3	23	機会	3	3.13	3	29	80年代	2	3.03	2
20	効率	2	4.65	2	18	母親	3	4.35	3	23	経済	3	3.13	3	29	NPO	2	3.03	2
20	貢献	2	4.65	2	31	シンポジウム	2	2.90	2	23	構築	3	3.13	3	29	センター	2	3.03	2
20	最近	2	4.65	2	31	ふるさと	2	2.90	2	23	高齢	3	3.13	3	29	テーマ	2	3.03	2
20	参加	2	4.65	2	31	われわれ	2	2.90	2	23	高齢者	3	3.13	4	29	やりがい	2	3.03	2
20	仕事	2	4.65	2	31	意識	2	2.90	2	23	参画	3	3.13	3	29	意識	2	3.03	2
20	自己実現(否定)	2	4.65	2	31	一人	2	2.90	2	23	就職	3	3.13	3	29	意欲	2	3.03	2
20	自己実現型	2	4.65	2	31	家	2	2.90	2	23	心	3	3.13	3	29	一人	2	3.03	2
20	収入	2	4.65	2	31	家族	2	2.90	2	23	進出	3	3.13	3	29	一定	2	3.03	2
20	障害者	2	4.65	2	31	家庭	2	2.90	2	23	人間	3	3.13	3	29	家庭	2	3.03	2
20	世界	2	4.65	2	31	解放	2	2.90	2	23	人権	3	3.13	3	29	学生	2	3.03	3
20	生きがい	2	4.65	2	31	学び	2	2.90	2	23	成熟	3	3.13	3	29	憲法	2	3.03	2

※ 全期間および1979年代以前と1980年代は上位20語まで提示し、1990年代と2000年代は上位50語まで機械的に提示した。

(1917～2009年)を対象として、テキストマイニング手法を用いて得られた結果のうち、「自己実現&社会」グループの名詞のみを取り出して時代ごと(基本的には5年単位)の単語ランキングを行い、これらを表にして一覧できる形にしたものである。

まず、【図表1-1】を参照した上で、全時代(1917～2009年)の「自己実現&社会」において、「社会」と「自己実現」に続いて3位に位置し、「社会」を含む自己実現言説の頻出キーワードとしては実質的な1位に相当する「女性(女、おんな、彼女)」(文章件数52件、件数頻度17.57%、61回出現)の動向に注目してみたい。

それでは、【図表2-2】に注目して、「女性(女、おんな、彼女)」の量的変遷を概観してみよう。「女性(女、おんな、彼女)」は、1980年代後半の「自己実現&社会」では、「社会」と「自己実現」に続いて3位(文章件数4件、件数頻度22.22%、4回出現)にランクされ、実質的な1位である。1990年代前半においては、「社会」を含む自己実現言説が43件カウントされているうち、「女性(女、おんな、彼女)」が実質的な1位の3位(文章件数15件、件数頻度34.88%、18回出現)であり、この時代の全文章件数の3分の1以上(15件/43件)を占め、際だった存在感を示している。1990年代後半において、「自己実現&社会」と条件付けられた文章は69件抽出されるが、そのうち、「女性(女、おんな、彼女)」はトップクラスを譲らず、実質的な1位の「参加」(文章件数12件、件数頻度17.39%、12回出現)に続いて、実質的な2位の4位(文章件数11件、件数頻度15.94%、15回出現)に位置している。2000年代前半においても、「自己実現&社会」と条件付けられた文章は96件のうち、「女性(女、おんな、彼女)」を含む言説は実質的なトップを占め、「社会」と「自己実現」に次ぐ3位(文章件数15件、件数頻度15.63%、17回出現)であり、やはり頻出単語として際だっている。

たしかに、2000年代後半には、いつの時代もほとんど実質的なトップの座を占めていた「女性(女、おんな、彼女)」を含む言説の件数が実質的な4位にすぎない6位(文章件数7件、件数頻度10.61%、7回出現)にまで下がっている点は注目に値する。だが、「自己実現&社会」という条件付きの自己実現言説において、「女性(女、おんな、彼女)」ほど、超時代的に頻出単語となるものは指摘できない。逆に言えば、2000年代とは、超時代的な頻出単語である「女性(女、おんな、彼女)」より上位に来る単語が存在することに明らかなように、時代的特徴を示した単語を指摘可能なほどに大きな変化が生じた時期だと解釈できる。このことを念頭に置きつつ、時代ごとのキーワードとなっている言葉について大まかに指摘していきたい。

まず、1980年代前半においては、そもそも「自己実現」のカウント数が少ないことも反映して、「自己実現&社会」に相当する文章は存在していなかった。また、1970年代以前の時期は、1917年から1979年までの長期間を考察対象としているので、量的な次元において時代的特徴を語るのには不向きであると判断して、いったん棚上げする。そのかわりというわけではないが、1980年代後半・1990年代前半・1990年代後半・2000年代前半・2000年代後半については、「自己実現&社会」における時代ごとのキーワードの抽出に努めたい。

1980年代後半に特有のキーワードとして、「生き方」に注目すべきである。実際、「生き方」という名詞表現は、【図表1-1】で見ると「自己実現」全体の名詞ランキングにおいては38位(文章件数39件、件数頻度1.68%、40回出現)にすぎなかったのにもかかわらず、1980年代後半の「自己実現&社会」における名詞ランキングに限定すると、「女性」と同位の4位(文章件数4件、件数頻度22.22%、4回出現)となり、一気に順位が34ランクも上昇している計算になる。また、

1980年代後半の「自己実現&社会」における「生き方」の合計4件は、【図表1-1】から確認できるように、「自己実現&社会」における「生き方」の合計10件（「自己実現&社会」で26位、件数頻度3.38%、10回出現）のちょうど4割（4件/10件）を占めている。登場件数としては少数であっても、このような事態は、現代的な自己実現概念が登場する1980年代において「生き方」が非常に中核的な位置を占めている用語であることを象徴していると言ってよい。

1990年代前半（1990～1994年）においては、「社会」を含む自己実現言説は43件カウントされている。先にも見たように、この時代における実質的1位の3位に位置する「女性（女、おんな、彼女）」の登場頻度は飛び抜けており、全体の3分の1以上を優に越える件数頻度34.88%（文章件数15件、18回出現）という極めて高い数字を叩き出している。この単語以外に、文章における出現頻度が10%を超えている単語としては、4位の「個人」（文章件数6件、件数頻度13.95%、6回出現）、同4位の「人（人々）」（文章件数6件、件数頻度13.95%、6回出現）、6位の「家庭」（文章件数5件、件数頻度11.63%、5回出現）、同6位の「企業」（文章件数5件、件数頻度11.63%、5回出現）、同6位の「人間」（文章件数5件、件数頻度11.63%、5回出現）が挙げられる。

ちなみに、「企業」という単語は、【図表1-1】から確認できるように、「自己実現」において全時代を通して件数頻度が1.76%（名詞の35位、文章件数41件、42回出現）にすぎなかったし、「自己実現&社会」における「企業」の件数頻度も3.72%（名詞の21位、文章件数11件、11回出現）にすぎないものであった。よって「企業」という単語は、1990年代前半という期間限定付きの「自己実現&社会」という文脈の自己実現言説において11.63%の件数頻度を示す点で非常に目立っているものであり、同時代の20位に「企業内」（文章件数2件、件数頻度4.65%、2件）という単語がランキングされていることもあわせて考えれば、まさに時代的キーワードとして注目に値するものだとみなせる。

1990年代後半（1995～1999年）において「自己実現&社会」と条件付けられた文章は、69件ある。【図表2-1】を見れば確認できるように、この時代の「社会」を含む自己実現言説においても、やはり「女性（女、おんな、彼女）」はトップクラスを譲らず、実質的2位の4位（文章件数11件、件数頻度15.94%、15回出現）であり、際だった存在感を示していることが再確認できる。だが、この単語より登場回数が多いものとして、「参加」という単語が、1990年代後半の「自己実現&社会」における実質的な1位の3位（文章件数12件、件数頻度17.39%、12回出現）を占めていることは特記に値する。たしかに、「参加」は、1990年代前半の「自己実現&社会」において20位（文章件数2件、件数頻度4.65%、2回出現）に位置しているように決して下位ではないが、「自己実現&社会」という文脈において、1990年代後半になって急に頻繁に用いられ始めたという印象を与えるほどである。実際、1990年代の前後で、その出現率が4倍近く（17.39%/4.65%）にまで上がっている。

また、この「参加」以外にも、1990年代後半の「自己実現&社会」に特有の単語が、いくつか存在する。そもそも1990年代後半の「自己実現&社会」で5位の「尊厳」（文章件数8件、件数頻度11.59%、8回出現）は、【図表1-1】から再確認できるように、「自己実現」全体では67位（文章件数26件、件数頻度1.12%、26回出現）にすぎないものであった。また、「自己実現」全体では107位（文章件数18件、件数頻度0.77%、18回出現）⁸⁾にすぎなかった「原則」が1990年代後半の「自己実現&社会」で7位（文章件数6件、件数頻度8.70%、6回出現）まで押し上げられていて100ランクもアップしている。さらに、【図表1-1】から確認できるように「自己実現」全体では

26位に位置する「自立」（文章件数48件、件数頻度2.07%、48回出現）は、【図表2-2】を見れば、1990年代後半の「自己実現＆社会」で7位（文章件数6件、件数頻度8.70%、6回出現）にまで上昇したことがわかる。同様に、【図表1-1】から再確認できるように、「自己実現」全体では81位にすぎない「ケア」（文章件数23件、件数頻度0.99%、24回出現）も、1990年代後半の「自己実現＆社会」では9位（文章件数5件、件数頻度7.25%、5回出現）まで上昇する。後ほど確認するが、「尊厳」・「原則」・「自立」・「ケア」が1990年代後半に頻出するのには、政策的に重点化されたことに伴う事情が関係している。

2000年代前半（2000～2004年）において「自己実現＆社会」と条件付けられた文章は96件である。この時代において、実質的1位の3位である「女性（女、おんな、彼女）」（文章件数15件、件数頻度15.63%、17回出現）の多さが際立っている。これ以外には、実質的2位に相当する4位に「個人」（文章件数10件、件数頻度10.42%、11回出現）、「子ども（子供、こども、子、児童）」（文章件数10件、件数頻度10.42%、11回出現）、「参加」（文章件数10件、件数頻度10.42%、10回出現）の3つの単語が並ぶ。1990年代後半以降から存在感が際立ち始めた「参加」は、「自己実現＆社会」に伴う単語として、2000年代以降は定着していったとみなせる。

最後に、2000年代後半（2005～2009年）の状況を分析してみよう。この時代において、「自己実現」を含む文章は585件あるのだが⁹⁾、そのうち「自己実現＆社会」と条件付けられた文章は66件である。そして、この時代には、多少なりとも例外的なことが起きている。それは、いつの時代もほとんど実質的なトップの座を占めていた「女性（女、おんな、彼女）」を含む言説の件数が実質的な4位の6位（文章件数7件、件数頻度10.61%、7回出現）にまで下がっており、「女性（女、おんな、彼女）」より上位に3単語も存在するという事態である。

では、2000年代後半の「自己実現＆社会」におけるトップ3は何か。まず、「社会」と「自己実現」に次ぐ3位で実質的な1位の「参加」（文章件数12件、件数頻度18.18%、12回出現）が際だって多く、2割近くの頻度（18.18%）で登場する。続いて実質的な2位の4位に「貢献」（文章件数8件、件数頻度12.12%、9回出現）、「人（人々）」（文章件数8件、件数頻度12.12%、8回出現）の2単語が並ぶ。ここで、「人（人々）」がいつの時代においても頻出する随伴的単語であったという考察を想起すれば、「参加」と「貢献」が2000年代後半の「自己実現＆社会」を特徴づけるキーワードであるという発見をいくら強調しすぎて強調しすぎることはない。なお、2000年代後半において、「女性（女、おんな、彼女）」と同じ6位に「仕事」（文章件数7件、件数頻度10.61%、8回出現）が並んでいる。よって、2000年代後半の「自己実現＆社会」における実質的な上位5単語は、「参加」・「貢献」・「人（人々）」・「女性」・「仕事」という具合であることが確認できる。

Ⅲ 「社会」を含む自己実現言説についての時代ごとの特徴

自己実現言説のうち「社会」を含む文章の歴史的動向については、量的次元から数量を測定するとともに、その文章の中身についても、頻出する単語を確認するという方向に歩みを進めることにより、質的次元を深めるための周辺的環境を整えたことになる。今度は、これらの考察を基盤としながら、直に文章に当たって、「社会」を含む自己実現言説がどのような特質を持っているかを把握したり、さらに踏みこんで自己実現言説における「社会」の性質を明らかにしたりしてみたい。その際、研究的手順としては、名詞ランキングについての量的次元における結果についての考察に

基づいて、時代の変化を把握していくことにする。

あらかじめ述べておくと、記述に丁寧に当たることは、単語の増減という量的次元の現象がなぜ生じてきたかの説明や理由を提供してくれることがある。また、結果的にわかることだが、「自己実現」という言葉が曖昧であるがゆえにかえって、それが見事に「時代ごとの価値観・価値意識」を映し出す鏡となっているという可能性を事前に指摘できるのである。このときの研究的立場の暗黙の前提として、誰が言ったかという個別的要因よりも、時代の磁場のもたらすマクロ的要因のほうが大きいという発想に立っていることを付言しておく。

なお、本稿において用いる新聞記事等の引用部分について、「自己実現」および他のキーワードをアンダーラインで目立たせるとともに、アンダーラインの種類を使い分けていくことにする。具体的には、「自己実現」という単語そのものには細いアンダーラインを引き、これに関連して重要だとみなせる単語には太いアンダーラインを引くことを基本とするが、対比したり強調したりすべき場合などには、必要に応じて二重線や波線などで下線を表現することにする。

A 1970年代以前（1917～1979年）の「社会」を含む自己実現言説についての概況

1979年以前の長い期間を見すえても自己実現言説は数少ないけれども、「自己実現&社会」という切り口を用いることには意味がある。当然、直に該当文章を読み込むことで、いろんな示唆が得られると思われる。

まず、第二次世界大戦前の時代において、「自己実現」が語られる際に「社会」が前提とされていた痕跡が見られる。1917年11月付けの朝日新聞には“社会的の自己実現—教育進化の六千年（三浦関造）”（記事タイトル等「出版界」、朝日新聞、全国版、1917年11月17日付、朝刊、東京）、翌年1月付けの読売新聞には“新刊紹介 社会的自己実現教育進化の六千年”（記事タイトル等「新刊紹介」、読売新聞、全国版、1918年1月11日付、朝刊、情報面）という表記が見られる¹⁰⁾。これらはともに、三浦関造という人が著者となった『社会的の自己実現』という本についての紹介の記事であるが、1910年代後半の時代において「自己実現」という日本語が「社会」との関係で一定程度の注目を浴びていたことを物語る証左だと言って差し支えない。

次に、「自己実現&社会」における名詞ランキングにおいては1970年代に2件カウントされているにすぎないけれども、当時の自己実現観の特徴を読み取るには十分な情報があると考えてよい。それらの自己実現概念は、一方では崇高な理念として高みに位置するエリート概念のごとく語られるが、他方では日常生活の中で誰しもが到達可能な目標として大衆の概念のごとく語られている。いずれにせよ、何らかの「現実」について将来的に向かわせるべき「理想」の域で「自己実現」というキーワードが示されるのである。

その一つを挙げると、「自己実現」とは、一個人による鍛錬の賜物であり、一般の人が簡単に手が届くものとは思われていなかったという一面が読み取れることであり、それがある種の格調高さの漂う「理念」として用いられていることである。実際、文献紹介として、“幾度の挫折（ざせつ）の中から「マラソンを楽しむ」境地をつかんだ宇佐見選手（執着力）、水中に鏡を置いた練習から独自の泳法をつくり上げた田口選手（創造力）、攻める自分と守る自分の同一化に成功した剣道日本一・千葉六段（自己実現）など、競争社会を勝ち抜くための心と体のあり様について多くのヒントを与えてくれる”（記事タイトル等「[ニュース・アラカルト] スポーツ選手が持つ精神力」、読売新聞、全国版、1975年9月29日付、朝刊、学術面）と書かれており、「競争社会を勝ち抜くための心と体のあり

様について多くのヒントを与えてくれる」一例として「攻める自分と守る自分の同一化」を「自己実現」とみなす考え方が提示されているが、この表現から鍛錬主義的な自己実現観が結果的に競争主義的な社会を超克する鍵となるという考え方が読み取れるであろう。

もう一つは、有識者が「生きがい」を主題として語る中で、「自己実現」について詳細に述べた中で展開される。“これからの主婦の自己実現も、個人の教養、趣味の分野だけでなく、社会にどう貢献しうるか、という尺度を重視した生活こそ一層すばらしい質の自己実現となり、充実した生きがいを生む、という結論になろうか”（記事タイトル等「今日の生きがい／山口彰」、読売新聞、全国版、1975年2月24日付、朝刊、学術面）と言われている。この言説の中で「これからの主婦の自己実現」が主張されている背景を読み取るのであれば、「これまでの主婦の自己実現」が「個人の教養、趣味の分野」に限定されがちであったという既成事実の存在が逆に浮かび上がって裏付けられる。とはいえ、「主婦」という表記で「女性」を主題としつつ、教養や趣味といった個人的な事柄に加えて「社会貢献」という形の「自己実現」を提言している点で、この文章はまさに「個人と社会との調和」を良しとする自己実現観の一例であると考えて差し支えなからう。

B 1980年代（1980～1989年）の「社会」を含む自己実現言説の状況

サンプル数としては少ないが、1980年代後半に特有のキーワードとしては「生き方」に着目する必要がある。実際の文章に当たれば、明確な傾向が読み取れる。予告的に言えば、そのポイントは、「自己実現」があくまでも個人本位の概念であり、あたかも社会本位もしくは国家本位の発想とは正反対に位置するかのように扱われている点である。

たしかに、個人の存在が国家本位・社会本位にもつながりうる媒介として「自己実現」を位置づけている記述も、極めて少数ながら見られる。たとえば、“学校での道德教育は、生徒が自己探求と自己実現に努め国家・社会の一員としての自覚に基づき行為しうる発達段階にあることを考慮し人間としての存り方生き方に関する教育を学校の教育活動全体を通じて行うことにより、充実を図るものとし、各教科に属する科目及び特別活動のそれぞれの特質に応じて適切な指導を行わなければならない”（記事タイトル等「高校・総則＜要旨＞ 改訂学習指導要領案」、朝日新聞、全国版、1989年2月11日付、朝刊、臨時面）という文章からは、生徒が「自己探求と自己実現」に努めていけば「国家・社会の一員としての自覚に基づく行為しうるだろう」というような楽観的な期待が読み取れる。

だがやはり、日本社会に対する現実認識としては、「国家や社会とは無関係の次元において、個人が果たすものが自己実現である」という意味合いで、「自己実現」という日本語が用いられていることがほとんどである。たとえば、“ひと昔前まで、日本人に根強くあった「国のため、社会のため」といった意識が薄れはじめ、自分自身の生き方、充実感を最優先させる「自己実現型」の人間が生まれ始めている兆しではないかというのだ”（記事タイトル等「会社拒否ヤングが急増 面白いアルバイトで 求人情報誌の3000人調査」、読売新聞、全国版、1987年3月19日付、夕刊、社会面）という記述が見受けられる。ここでは、「『国のため、社会のため』といった意識」と「自分自身の生き方、充実感」とが鋭く対比され、後者の自分本位の主観的状況を最優先させる人間について「『自己実現型』の人間」というレッテルが貼られている。この文章の中では、「個人」という表記は見当たらないが、「自分自身」という表現が実質的に「個人」に相当するとみなしてよいであろう。

実際、社会の個々の構成員が「個人」として扱われ出したという意味合いで「自己実現」がクローズアップする。たとえば、“女も男も能力と個性を持つ1人の人間である限り、自己実現を果たし

社会に貢献して生きるのは当然の生き方であるし、仕事をしたいと望むのは人間の本能である”(記事タイトル等「家族(テーマ談話室)」、朝日新聞、全国版、1988年6月29日付、朝刊、解説面)という表現からは、「能力と個性を持つ1人の人間」たることが前提となって初めて「自己実現が果たしうる」という考え方が垣間見られる。また、“女性の社会進出が進み、人々の生き方が個性化・多様化し、カルチャースクールに通うなど自己実現志向が強くなっている”(記事タイトル等「[消費者はいま](1)無口な王様 企業への“モノ言い”減る(連載)」、読売新聞、全国版、1988年12月13日付、東京朝刊、婦人A面)という文章においても、文中の「人々」の中軸には「女性」が位置するので、実質的に「女性」による「個人としての生き方」が個性化・多様化したことを象徴するキーワードとして「自己実現」が主題化されたものとみなせる。

さらに、こうした意味での「個人主義化」を裏付ける単語として、1980年代の「自己実現&社会」グループで特に注目すべきキーワードを挙げるとすれば、それは「消費」であり、3件カウントされている。実は、これは一つの記事から3件カウントされた結果なので、この記事中の文章を丁寧に確認しておく必要がある。

この記事では、「自己実現、個性の発揮、微細な差異を求める感性、目的探究的な生の追求

といったこと自体は、消費社会論者がいうように、大いに好ましいものであって、なんら異議をさしはさむべきものではない”(記事タイトル等「生」のきしみと「消費」のにぎわい 中村達也(土曜講座)」、朝日新聞、全国版、1986年2月1日付、夕刊、夕刊経済特集)という文章があり、「自己実現」・「個性の発揮」・「微細な差異を求める感性」・「目的探求的な生の追求」といった単語が並列していることに象徴されるように、この時代には「自己実現」が「個人の生き方」に関わる問題であるという認識が既成事実のごとく広く受け入れられていることが明らかである。

そして、ここで「消費社会論」という専門用語が浮かび上がるとともに、この文章の執筆者である中村達也が「消費社会」に対して批判的であることに注目すべきである。この論者は、“確かに30年も前であれば、より多くのモノを所有し消費することは、それこそ生活を支え、自己実現を促し、「幸福な」心理状況をもたらしたかもしれない”(同上)という状況認識を示してはいるけれども、他方で「かつての消費」と「現在の消費」とでは、「自己実現」をめぐる意味合いが違うことをほのめかした上で、“しかし、モノ豊かないま、成長社会の住人は、消費の領域を越えたところでの自己実現といったことをすっかり忘れてしまったように見える”(同上)という文章では、「消費の領域を越えたところでの自己実現」という言い方を強調することにより、その当時の自己実現観が「消費に閉じ込められてしまっている自己実現」と化してしまっているという既成事実を逆照射する。だからこそ、この記事の論者は、“消費社会論者が語るのとは違って消費者が自己実現のために差異化されたモノとイメージを自ら求めている、というよりは、むしろ、マーケティング現場の方がはるかに先んじていて、いかにも消費者の「感性」にフィットしそうなモノを周到に品ぞろえして、いわば自己実現を強いてさえいるようでもあるのだ”(同上)という文章で、「強いられた自己実現」という概念により、いわば自己実現概念が「消費社会」にすでに毒されているという現実認識を示すのである。

いずれにせよ、1980年代の前半から後半にかけて「消費社会」が非常に重要な位置を占めているという着眼は、1980年代のまっただ中に生きる同時代人の発言として極めて鋭い。興味深いことに、この鋭さは、他の時代から「80年代＝八〇年代」が注目され解説されているという事実によって裏打ちされている。自己実現観を歴史的に回顧する上での1980年代の位置づけや意味づけ

は、それから時代を下った1990年代や2000年代に再認識されるが、そこでの「消費」がまさに重要キーワードと化しているのである。実際、「1980年代の消費社会」が回顧されるという文脈で「社会」と「自己実現」が同時に用いられているのである。

1997年の記事として、1980年代に「女性」が主題化される中で「消費社会」に焦点が当たっていくものがあり、“社会が彼女たちに用意したものは、皮肉にも、八〇年代の「女の時代」、すなわち、消費によって女たちがどこまでも自己実現してゆけるというストーリーであった”（記事タイトル等『彼女たち』の連合赤軍 大塚英志著（書評）」、朝日新聞、全国版、1997年1月26日付、朝刊、読書面、評者＝森岡正博）と書かれている。この著書を書いた大塚英志によれば、「女の時代」たる1980年代とは「女性が消費によって自己実現できる時代」なのである。また、1999年に出された文章で「1980年代」を回顧したものが存在していて、“アメリカは個人中心の社会で親せきや近隣住民で助け合うという習慣がないため、貧しい人たちが葬儀を準備するためにこうしたシステムが始まり、八〇年代には個性ある葬儀をめざす自己実現型に変化した”（記事タイトル等「自分の葬儀、自分で予約 準備サービス、加入者急増」、朝日新聞、全国版、1999年5月27日付、朝刊、家面）という表記も、「個性ある葬儀」という「消費活動」をめざす「自己実現」へと変化したのが1980年代だということが述べられている文章だとみなせる。

さらに、2000年代後半の時点でも、「1980年代」は、「消費」を鍵として注目されている。たとえば、“両者とも80年代の消費社会の到来とともに女性の中に横溢（おういつ）した、自由や自己実現への欲求を起爆力にしたことは共通している”（記事タイトル等「ルンルンを買ってうちに帰ろう 伏見憲明：3（大好きだった）」、朝日新聞、全国版、2005年1月21日付、夕刊、文化芸能面）という表現からは、「自己実現できる背景」としての「消費社会」が“人はその消費生活を通じて自己実現する」という80年代から私たちの社会を支配していたイデオロギーは少なくとも20歳の女性たちの間では急速に力を失いつつある”（記事タイトル等「感情模索：6」『ファミレス現象』に幻滅 東京の輝き消え、移る関心」、朝日新聞、全国版、2009年1月8日付、朝刊、文化面）といった表現で、「女性による消費」が「自己実現」に密接に重なり合う形で考えられていたという認識を歴史的に振り返ることができる。このように、後の時代から古い時代を振り返るという形になっているが、1980年代が「消費をつうじた女性の自己実現」が中心的話題の一つであったことが明確に確認できるとともに、「消費主体としての女性」の行動パターンなどにも推量が見えそうな内容を含んでいる。

以上から、1980年代の自己実現概念を語る上での「社会的文脈」として「消費社会」というキーワードを忘れてはならないことが判明する。「消費社会」にプラスの価値を与えるかマイナスの意味づけをするかは別として、1980年代の自己実現観を語る上で「消費」は不可欠であるという歴史認識にまちがいないだろう。そして、その主役として「女性」が浮かび上がる。「女性が自己実現できることを可能にした社会」が到来したのが1980年代であり、その主たる部分が「消費社会」に依拠するというわけである。これまでも見てきたように、1980年代後半になってから、日本語「自己実現」が広がり始める¹¹⁾。1980年代は、自己実現概念の歴史にとって「現代的自己実現の出発点」であり、まさに大きな時代の転換点でもあったのである。

C 1990年代前半（1990～1994年）の「社会」を含む自己実現言説の状況

先に発見したように、「企業」という単語は、1990年代前半という期間限定付きの「自己実現&社会」という文脈の自己実現言説において注目に値する。この時代における「企業」を含む文章の

特徴を具体的に確認すれば、「自己実現」が語られる際には、「企業の社会貢献」というニュアンスが感じられるようなものが主流だと判明する。

たしかに、“サービス業の労働者が増える、などの社会の変化、自己実現への欲求、企業への忠誠度の変化など理由は様々だ”（記事タイトル等「定形外の仕組み（天声人語）」、朝日新聞、全国版、1992年7月1日付、朝刊、総合面）のように、「社会」と「自己実現」と「企業」とが文法的にも内容的にも相互に密接な連関を持たないような文章も存在する。だが、この文章以外は、「企業の社会貢献」という意味合いが強いものばかりである。たとえば、“企業も社会貢献に取り組み、併せて社員の自己実現の機会を確保する”（記事タイトル等「貢献より昇進!? ボランティア休職制度の募集難航【大阪】」、朝日新聞、大阪版、1992年9月28日付、朝刊、社会面）という文章は、直に「企業の社会貢献」を提言する意味合いがあるし、“世界が、効率や利便性を重視した「工業化社会」から、人間の個性や自己実現を追求する「知的創造社会」へ変化していくととらえ、新しいトレンドを創造し世界文化の進展に貢献する企業を掲げている”（記事タイトル等「新しいトレンド創造、世界文化進展に貢献 松下電器グループ【大阪】」、朝日新聞、大阪版、1990年4月26日付、朝刊、経済面）や“個人の「自己実現」や「社会参加」の場として、企業を共生的なシステムととらえる視点を持たなければいけない”（記事タイトル等「シンポ『都市と音楽5』—企業文化の展望【大阪】」、朝日新聞、大阪版、1991年12月11日付、夕刊、大阪特集）といった文章からは、「企業」に対して、単なる営利追求組織にとどまらない存在たることへの期待が読み取れる。なお、以上の分析結果は、1990年代前半に「メセナ」ということが流行したことと大いに関係すると推察してよいだろう¹²⁾。

D 1990年代後半（1995～1999年）の「社会」を含む自己実現言説の状況

先に考察したように、1990年代後半の「自己実現&社会」という条件をつけると、「尊厳」・「原則」・「自立」・「ケア」といった単語が「社会」との絡みでクローズアップする。これは、これらの単語が、その時代におけるまさに社会的問題として語られる文脈があるからである。ここでは、1999年が「国連世界高齢者年」が定められたことの絡みで、キーワードに顕著な特徴が見られる。こうした状況の発生は、まさに国連世界高齢者年が何度も記事として取り上げられたのが主たる原因である。実際、国連世界高齢者年の原則の「自立・参加・ケア・自己実現・尊厳」という中味が反復されたことは、「自己実現」に同伴した他の単語の出現回数を飛躍的に増やす。そこで、具体的な文章を確認しておく。

国連世界高齢者年の前年の1998年には、“高齢者の自立、参加、ケア、自己実現、尊厳——を盛り込んだ「高齢者のための国連原則」を具体化させるため、「すべての世代のための社会をめざして」を統一テーマに掲げている”（記事タイトル等「国際高齢者年を前にシルバーパワーを結集 国内10団体が連携、協議会来月発足」、読売新聞、全国版、1998年9月9日付、東京朝刊、生活面）といった文章が複数以上も見受けられる。国連世界高齢者年に指定された1999年にも、“「すべての世代のための社会をめざして」をテーマに、高齢者の「自立」「参加」「ケア」「自己実現」「尊厳」の5原則を実現することをめざす”（記事タイトル等「高齢、そのしたたかな可能性 北林谷栄さんと辺見庸さん（対論）」、朝日新聞、全国版、1999年1月16日付、朝刊、オピニオン面）や“前文には「すべての世代のための長寿社会を目指して」とし、高齢者のための国連原則「自立、参加、ケア、自己実現、尊厳」を取り入れ、わかりやすく表現した”（記事タイトル等「長寿社会憲章を制定 県、国際高齢者年で＝青森」、読売新聞、地方版、1999年10月6日付、東京朝刊、青森）といった類似表現が繰り返されていた。つまり、テキストマイニ

ング手法で研究活動を行う際の注意点を促すことでもあるが、国連世界高齢者年に絡んだ内容が報道されるたびに、半ば自動的にカウント数が増える単語があることを意識しないわけにはいかないのである¹³⁾。

具体的には、国連世界高齢者年に関する話題が出るたび、「自己実現」を含む文章を拾えば拾うほど、「社会」が目指すべき具体的内容として、「自立」・「参加」・「ケア」・「尊厳」という日本語が繰り返されることになる。しかも、それを統合するキーワードである「原則」は、「自己実現」とは直につながらない。こうして、1990年代後半を特徴づける単語が、時代的な自然な流れと言うより、強力な要因によって定まってしまうのである。むろん、“原則では高齢者の独立や社会参加、保護・介護、自己実現、尊厳の実現などをうたっている”（記事タイトル等「[ミニ時典] 国際高齢者年」、読売新聞、全国版、1998年9月10日付、東京朝刊、二面）といった文章のように、「自立」を「独立」に、「ケア」を「保護・介護」といった別表現に取り替えたものについては、置換前の単語の数は増えないけれども、それゆえにかえて置換された後の言葉の意味合いと元の言葉との連動性を意識しなければ、きめ細かい研究にはならないことを意識せざるをえない。

たしかに、国際世界高齢者年を直に扱ったものでなくても、“少子高齢化社会が進行する中で、高齢者や障害者が独立し、自己実現できるような環境を整えていかなくてはならない”（記事タイトル等『福祉のまちづくり研究会』神戸で全国大会開く＝兵庫」、読売新聞、地方版、1999年7月24日付、大阪朝刊、神戸）とか、“その支援に加えて、元気な高齢者には社会にかかわって、自己実現を図ってもらう”（記事タイトル等「平岡敬氏 広島市長選候補者に聞く：上 / 広島」、朝日新聞、地方版、1995年1月24日付、朝刊、広島）というような文章に見られるように、高齢化社会の進展を見すえて「高齢者の自立」が強調されることも頻繁である。だが、研究手順として冷静に見れば、同じ内容が引用される場面が増えれば増えるほど、特定の単語の出現回数が増えていくという事態が生じることは否めない。このようなわけで、社会政策的動向や社会運動が直に単語ランキングに影響を与えているという事実を決して忘れてはならないのである。

E 2000年代前半（2000～2004年）の「社会」を含む自己実現言説の状況

先に見た中でも、2000年代前半の「自己実現&社会」を特徴付ける単語として、「子ども（子供、こども、子、児童）」に特に注目しておきたい。この場合、「子ども」が「女性の自己実現」に絡む形で出てくるのみならず、「子ども」単独で出てくるようになったことが特徴的である。

たしかに、この単語に関する内容は、「女性の出産・育児」といった「自己実現主体としての女性にとっての付帯条件」というような言い方で出てくることも多い。たとえば、“少子化問題が叫ばれているが、女性が自己実現できる社会になれば、安心して子どもを産める”（記事タイトル等「貴重な1票無駄にしないで（どこへ 総選挙2000あいち）／愛知」、朝日新聞、地方版、2000年6月19日付、朝刊、愛知）や、“安心して子供を生め、子育てし、生き生きと自己実現が出来るよう、休日保育、二十四時間保育、一時託児など保育環境を整備し、女性が参加出来る社会を実現したい”（記事タイトル等「参院選山梨選挙区 5候補、力強く第一声＝山梨」、読売新聞、全国版、2001年7月13日付、東京朝刊、山梨）といった文章表現が挙げられる。

だが、2000年代前半には、「自己実現主体としての子ども」という内容が主張されるようになったことが特徴的である。実際、「子どもが自己実現主体たること」を理想状況として提言するものが見かけられ、たとえば“親に孝行する子どもになりなさいとか、愛国心をもつ人間になりなさい

というよりも、子どもたちが自己実現を果たすために、社会や地域や学校がどうサポートするかに重点を置くべきだ”(記事タイトル等「教育・皇位・安保で論議(国会調査会から 憲法を考える)」、朝日新聞、全国版、2003年2月25日付、朝刊、東特集K)という表現は、子どもが主体となった「個人尊重主義」とでも言うべき考え方の萌芽である。さらに、「子どもが自己実現できる存在であること」を事実的な事柄として前提に置く文章が多く存在することが特徴的である。たとえば、「子ども自身が尊重され、自分の持っている能力を十分発揮し、自己実現ができる社会を目指します——。”(記事タイトル等「[広瀬川]鈍感ではいられない＝宮城」、読売新聞、地方版、2004年9月12日付、東京朝刊、仙台)や“子どもは自分自身の自尊心を育てようと努力し、社会の一員として自分らしく参画し、自己実現しようとします”(記事タイトル等「[子どもたちは]1年を振り返る 輝く出来事… 稲垣由子・甲南女子大教授」、読売新聞、全国版、2004年12月23日付、大阪朝刊、生活B面)といった表現が見られる。

ただし、「社会は個人主義化しており、子どもも将来より今の自分が大切なため、自己実現の欲求が強い”(記事タイトル等「揺れる子、迷い悩む教師 2つの教育研究集会から(検証)」、朝日新聞、全国版、2001年2月3日付、朝刊、社会面)というように、子どもに限らず「自己実現を求めること」それ自体に対する批判的論調も見られる。なお、この場合の「個人主義」とは、「社会のことを考えず自分本位にふるまうこと」という意味合いに偏って理解されていることには注意を促したい。

いずれにせよ、「社会」において「子ども」がどのような存在であるべきかが論じられる文脈におけるキーワードとして「自己実現」がクローズアップしていることが確認できよう。

F 2000年代後半(2005～2009年)の「社会」を含む自己実現言説の状況

筆者としては、「自己実現&社会」に関して2000年代後半になって目立って登場した単語として、8位(実質6位)の「目的」(文章件数6件、件数頻度9.09%、6回出現)を特記したい。そして、あわせて、一般に「目的」と対になって用いられる単語の「手段」(文章件数5件、件数頻度7.58%、5回出現)が11位(実質9位)に位置していることにも注目したい。

この時代に明確に浮き出てきた考え方として、「仕事」や「働くこと」もしくは「労働」が「生計を立てる手段」という意味合いから「自己実現のための手段」という意味合いへと移行して考えられるようになってきたことである。たとえば、「社会が成熟するにつれ、働くことが生計を立てる手段から、自己実現を図る目的に変わってきている”(記事タイトル等「週末だけ店主の顔 主婦、趣味高じパン屋 【西部】」、朝日新聞、西部版、2008年7月29日付、夕刊、2社会面)という文章は、その典型例である。

このことは「仕事は手段か目的か」という問題へと展開しており、政策的是非という切実な場面でも話題になっていて、「製造業派遣であれば、そもそも働くという行為を社会の中でどう位置づけるのか、所得を稼ぐ手段なのか、自己実現なのか、社会参加なのかといった問題意識を持って、民主党の政策の是非を論じることも必要だ”(記事タイトル等「(メディア衆論)民主新政権の経済政策、大丈夫か」、朝日新聞、全国版、2009年10月30日付、朝刊、オピニオン面)というような表記で、「働くという行為」の「社会的な位置づけ」をめぐる、「所得を稼ぐ手段」と「自己実現」と「社会参加」といった三つの選択肢が示されている場面もある。実際、1990年代前半に話題化した「働く場」としての「企業」について、「企業とは人々に生計の手段、社会とのきずな、そして自己実現の場を与える存在です”(記事タイトル等「(資本主義はどこへ)大不況 政府・企業がすべきことは?」、朝日新聞、全国版、2009年1月11日付、朝刊、オピニオン面)という提言もなされているのである。

まとめにかえて

テキストマイニングを用いた本研究では、結果から遡った言い方をすれば、量的アプローチと質的アプローチとが相克的というよりも相補的な関係にあり、それだけでなく相乗的な関係にあるとすらみなせる。量的アプローチを進めることが質的研究にヒントを与え、質的研究を進める中で改めて量的研究を進めるべき方向性が見えてくるという具合になっている。これは、研究方法論的に新たな領野を開拓しているとみなせるし、筆者に即して言えば、自己実現概念の研究に様々な可能性を開いた。この研究方法論は、自己実現概念以外にも応用できるのは言うまでもないが、本研究の対象のような「自己実現」といった曖昧さが高ければ高い概念であるほど、その威力をてきめん発揮してくれるのではないかと期待できる。

実際、本稿において「社会」という言葉の用いられ方を多面的に追求することにより、部分的には「自己実現」の語られる「社会的文脈」が明らかになったと言える。そのうち、「社会への関わり方」という視点から特に覚え書きとして留めておくべき重要ポイントを列挙しておく。

第一に、「社会への関わり方」として、「参加」や「貢献」というキーワードが欠かせないという事実が明らかになった。これについては、「社会参加」と「社会貢献」について考察し、さらには「女性の社会進出」についても論究した論文をすでに出している¹⁴⁾ので、そちらを参照してほしい。

第二に、「女性の社会への関わり方」の問題として、「自己実現」が極めて切実な問題だということがはっきりした。本稿では、主に「消費社会」との関わりで「女性にとっての自己実現」の特徴が明らかになる端緒が若干開かれた。「女性と自己実現」という主題については、機会を改めて詳しく考察したいと考える。

第三に、「社会への関わり方」を考える際に、「個人」というキーワードがどのように位置づけられてきたかを再確認するべき必要性が浮かび上がる。そもそも、歴史的発祥まで遡れば、日本における自己実現思想は19世紀末に「個人と社会との調和」を原点に置いたものである¹⁵⁾。改めて、自己実現言説における「個人」に焦点を絞って分析・考察すべき必然性が、本稿の結果から明らかになったと言える。この課題については、本稿との直のつながりを意識しながら、次回に展開する予定である。

一注・引用文献一

- 1) 本稿については、以下の拙稿との姉妹作として位置づけている。佐々木英和「自己実現言説における『社会』の位置づけに関する一考察ーテキストマイニング手法による新事実の発見と実証の試みー」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第65号第1部、2015年所収、229～248頁。また、本稿独特の表記方法について逐一説明を入れないうまうしている場合があるが、その点については以下の拙稿で説明済みであるので、必要に応じて参照のこと。佐々木英和「現代日本語『自己実現』の特徴を実証する基礎データの提示ー質的データの量的把握による整理ー」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第64号第1部、2014年所収、221～246頁。
- 2) 筆者は、自己実現概念の「変化」の量的側面を「第一局面」、その質的側面を「第二局面」として位置づけ、それらを立体的に重ね合わせることの必要性を研究方法論的に主張している

- (佐々木英和「自己実現についての歴史研究に関する手続き論」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第55号第1部、2005年所収、214～216頁)。
- 3) テキストマイニングソフトでは、「同義語」と思われる単語を登録して「同一語」として扱ってカウントしたり、分析上はほとんど意味をなさないと思われる単語を削除したりすることができ(佐々木、前掲論文、2014年、226頁)。本研究は、元データを扱う際に、この次元の作業を十分には洗練させていないので、改めて作業し直す機会をうかがっている次第である。
 - 4) すでに進められている考察結果より得られた結論から言えば、「自己実現&社会」において「参加」と「貢献」の数が多いのは、「社会参加」と「社会貢献」という複合語が頻出するからである(佐々木、前掲論文、2015年、238～247頁)。
 - 5) テキストマイニング手法における「係り受け」でも、「社会－貢献」と「社会－貢献する」という組み合わせが頻出していることがすでに明らかになっている(同上、232頁および244～245頁)。
 - 6) 佐々木、前掲論文、2014年、227頁。ただし、現段階の本研究は、時間の制約上、テキストマイニングソフト任せで、それこそ機械的に出した数字なので、一つ一つの文章を精査すれば、この数字の出方に留保条件をつける場合が出てくる可能性があり、場合によっては訂正を加えることもありうることを意識しながら研究活動を進めていることを告白しておく。
 - 7) 同上、224頁、【図表1-2】参照。他には、本稿で新情報を付加した。
 - 8) 同上、232頁、【図表4-2-a】。
 - 9) 同上、224頁、【図表1-2】参照。他には、本稿で新情報を付加した。
 - 10) ここで、昨年に出した論文の内容についての訂正をしておきたい。昨年の時点で、「自己実現」の登場でもっとも古いものとして、1918年1月の読売新聞記事を例示していた(佐々木、前掲論文、2015年、233頁)。だが、これは引用間違いである。むしろ、これは読売新聞社のヨミダスだけを用いた場合には妥当であるが、朝日新聞社のデータベース閲覧も用いると、同じ内容の記事が前年の1917年の11月に出ている事実を否定できない。そこで、筆者としては、本文において引用したものを、読売新聞のものから朝日新聞のものへ差し替えることにより、訂正完了とする(同上)。
 - 11) 佐々木、前掲論文、2014年、224頁。【図表1-3】のグラフを一覧すれば、このことが視覚的に明らかである。
 - 12) 辞書の定義に従えば、“メセナ”とは、“文化・芸術などを庇護・支援すること”であり、“特に、企業などが見返りを求めずに資金を提供する文化擁護活動をいう”と定義されている(小学館国語辞典編集部『精選版 日本国語大辞典 第三巻』(は～ん)、小学館、2006年初版、934頁)。
 - 13) 佐々木英和「現代日本語『自己実現』の意味内容の変質－テキストマイニングの手法を用いた通時的考察－」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第63号第1部、2013年所収、261～262頁。
 - 14) 佐々木、前掲論文、2015年、229～248頁。
 - 15) 同上、230頁。また、以下の拙稿では、詳細に日本語「自己実現」の原点を考察している。佐々木英和「明治中後期における自己実現思想の輸入の様相－日本語『自我実現』の創造にイギリス理想主義が果たした役割－」、行安茂編『イギリス理想主義と河合榮治郎』、世界思想社、2014年所収、203～205頁。

【付記】

本稿には、以下の研究費の活用により得た成果が生かされている。財団法人上廣倫理財団研究助成「日本の自己実現思想における『個人と社会との調和』概念の倫理学的展開と社会的受容」（佐々木英和研究代表、平成24～25年度）、科学研究費補助金・基盤研究(C)「明治・大正・昭和初期の日本における自己実現思想の教育学的展開と教化政策」（佐々木英和研究代表、平成25～27年度、課題番号25381010）。

平成27年10月1日受理